

# 戦間期パリにおける人種とジェンダー

——ナルダル姉妹の『黒人世界評論』を中心に

平野 千果子

はじめに

第一次世界大戦でフランスは多くの人命を失った。一四〇万に上る死者数は、戦後社会の再建にも大きな足かせとなる規模である。しかもフランスは北東部を中心に、主戦場の一つだった。さしあたり戦勝国になったものの、国土は荒廃し、戦後は没落感が色濃く広がった。ポール・ヴァレリーの『精神の危機』（一九一九年）は頻繁に言及されるところである。

他方で敗戦国ドイツから新たにアフリカの領土を得たこともあり、植民地帝国の規模は史上最大となった。そもそもフランスは戦争に植民地を全面的に動員していた。各地から物資や戦費を調達したのみならず、住民を労働者として徴用したし、兵士として戦場に送り出した。植民地の「戦争への貢献」は各界で認識され、それまで人びとの意識に希薄だった植民地は、戦後にはにわかに身近な存在として感じられるようになった<sup>1</sup>。

とくに注目を集めたのはアフリカだった。芸術や文化の面に目を向ければ、アフリカの彫像などが「黒人芸術」あるいは「原始芸術」などとして関心呼んだ。ヨーロッパの芸術家たちが多大な影響を受けたのも周知のことになる。属すだろう。アメリカからはジャズやチャールストンがもち込まれて、フランスでも「黒人レビュー」が人気を博した。これらは後に「狂乱の時代」と呼ばれる一九二〇年代のフランスを象徴するものだった。<sup>2</sup>

この時代、実際にフランスにやってくる植民地出身者もあった。それまでは大半が労働者だったが、大戦後にはそれなりの教養を身に着けた者たちが、とりわけ首都のパリに到来した。異なる植民地の者たちが宗主国の首都で出会い、それぞれに団体を結成したり刊行物を出版したりしたのは、この時代を特徴づけることである。多くの場合、それらは種々の理由から長続きしなかったとはいえ、それゆえにこそ多様な出版物が次々と発刊される状況につながったと考えられる。<sup>3</sup>

そうしてパリに集った植民地出身者の間から、「ネグリチュード」という文学運動が誕生したのは、今日ではあまりに有名だろう。セネガルのレオポール・セダール・サンゴール、カリブ海マルティニックのエメ・セゼール、そして南米ギアナのゴントラン・ダマスの三人が創始者に名を連ねている。彼らもそれぞれに勉学を続けながら、新聞や雑誌に関わるなかからネグリチュード運動を起こしていった。

ところでネグリチュードについては近年、その先駆的思想がマルティニック出身のナルダル姉妹に由来すること、研究者の間では周知の事実となってきた。彼女たちはやはり戦間期にパリに在住し、新聞や雑誌に寄稿した。<sup>4</sup>のみならず、長女のポーレットを主筆に雑誌『黒人世界評論 (*La Revue du monde noir*)』を創刊したり、パリ郊外にサロンを開いたりして、活発な知的交流を実践している。姉妹に早くから言及する書物もあったとはいえ、それらはサンゴールやセゼールの伝記、あるいは戦間期の黒人運動に関する研究の関連で触れたものが多かった。<sup>5</sup>

彼女たち自身を対象とする研究が本格化するのには、ようやく二〇〇〇年前後からになる。さらに言えば、圧倒的に英語圏からの発信が多い。フランスでは、そもそも黒人研究が近年までさほど進展してこなかった。まして黒人の女性が関心を呼びにくかったことは、研究が希薄な背景として指摘されるだろう。

それらナルダル姉妹をめぐる研究は、ネグリチユードの先駆的思想との位置づけから、その複数性を見出すもので、多様に展開されてきている。<sup>7</sup> 本稿はそうした蓄積を参照しつつ、彼女たちが主体となつて創刊した雑誌『黒人世界評論』を中心に、さらに考察を深めたい。それにあたり、多くの論考がそうであるように、本稿でも長姉のポーレットに主たる関心を寄せていく。彼女は第二次世界大戦後には故郷マルティニックで新聞を発行するなど、姉妹の間でも抜きんでて言論活動を続けたうえ、一九七〇年代に行われたインタヴューも没後になるが刊行されており、情報量も多い。ただし、パリでは妹のジェインとアンドレも行動を共にしているし、とくにジェインは重要な論考をしたためており、それを抜きにポーレットの思想を考えることはできない。本稿でもジェインの論考を適宜参照しながら、論を進めることとする。<sup>9</sup>

以下の行論では、はじめにポーレットの歩みを簡単にたどる。次いでナルダル姉妹を中心に創刊された『黒人世界評論』のめざしたところを整理する。その後、ポーレット、そして必要に応じてジェインの論考を手掛かりに、いわゆるネグリチユードに照らしてその思想を読み解き、最後にジェンダーの視点も交えてさらに読解を深めることとする。なお本来、「人種」なるものはないが、本稿では通念として使われている用語として、白人や黒人といった言葉を使うことをお断りしておきたい。<sup>10</sup>

## 一、パリのポーレット・ナルダル

## (1) ポーレット・ナルダルの生涯

はじめにポーレット・ナルダルの歩みを簡単にたどっておこう。一八九六年、マルティニックに生まれたポーレットは、裕福な家庭で七人姉妹の長女として育った。<sup>11</sup> 第一次世界大戦が終わると一九二〇年に渡仏して、英語学を学ぶためにソルボンヌ大学に入学した。黒人女性としてはソルボンヌ初の学生である。卒業論文の題材は『アンクル・トムの小屋』だった。<sup>12</sup>

ポーレットは、やはりパリに来た妹ジェインとともに植民地出身者による雑誌に寄稿を始め、一九三一年には独自の雑誌『黒人世界評論』の創刊も果たした。その傍らで、二人に合流した末妹のアンドレも交えて、パリ郊外のクラマールでサロンを開いている。<sup>14</sup> 日曜の午後に開催されたこのサロンでは、イギリス式のお茶のみが提供され、パリや世界の時事問題、植民地／人種問題、フランスの有色人など、さまざまなテーマで議論が繰り広げられた。時折ピアノを弾く者があったり、カリブ海の詩が朗読されたり、さらには黒人霊歌やブルースが歌われることもあったという。<sup>15</sup>

サロンに馴染みの者として、南米の仏領ギアナがルーツのルネ・マランがいた。マランは一九二一年に黒人として初めてゴンクール賞を受賞した作家である。マランを介してこのサロンには、同時代にアメリカで広まっていたニュー・ニグロの文化運動の担い手たちも顔を出した。クロード・マッケイ、ラングストン・ヒューズ、ウォルター・ホワイトなどの作品は、『黒人世界評論』に掲載されてもいる。サロンでは、マランだけでなく、ニュー・ニグロの旗手とされるアレイン・ロックなどの作品を朗読することもあったという。<sup>16</sup>

先回りして記しておくなら、『黒人世界評論』を創刊した背景として、ポーレット自身がアメリカの作家や芸術家との出会いがあったことに言及している。「アメリカで黒人が置かれた状況への痛みを伴う覚醒」があったと述べているのは、彼らを通して、自らのものとしてそれらの痛みを受け止めたことが察せられよう。そして彼らが主体となった「ブラック・ルネサンス」は、アメリカ黒人の歴史においてきわめて重要な出来事 (fait capital) であり、その模倣にとどまらない自分たちの知的な目覚めに気づいたという喜びが、自身の雑誌の誕生につながったのだという。<sup>17</sup> こうした豊かな知的交流がナルダル姉妹の思想形成に小さからぬ影響を残したことは、確認しておきたい。

ちなみに『黒人世界評論』は全巻すべて、ページの左側がフランス語、右側が英語と、二言語で編まれていた。英訳はポーレットが担った。アメリカの思想家・運動家たちとの交流や彼らへの共感が、こうした構成の背後にあったのではないか。

ナルダル姉妹が雑誌を創刊した一九三〇年代は、二〇年代とは大きく異なる時代状況となる。フランスにもアメリカ発の大恐慌の影響が及んできたのに加え、一九三三年初頭にはドイツでヒトラー政権が樹立された。一九三五年になるとイタリアがエチオピアに侵攻する。ポーレットは戦争とファシズムに反対する市民団体の調整委員会の一員として、侵攻に対する黒人の抵抗を支援すべく、関連団体と接触するためベルギー国内を駆け回った。<sup>18</sup> 一九三九年には植民地省の依頼で観光用のフィルム撮影のためマルティニックに滞在し、パリに戻る船上で第二次世界大戦の勃発となった。しかも船がドイツ軍の潜水艦による攻撃を受けて逃げる途中で膝を折り、障害を負った。結局その後はマルティニックに居を定めることとなった。<sup>19</sup>

大戦が終結すると「女性の団結 (Rassemblement féminin)」という団体を立ち上げたのに加えて、自身の新聞も当地で発行し、女性の政治参加を促す言論活動を進めた。一九五六年には家が火災に見舞われて、多くの資料が焼

失した。これは彼女の業績が伝わらなかつた一因とも考えられるが、一九八五年の逝去から三〇年以上を経た二〇一八年になって、生前のインタヴューが一書として刊行されたのは、それを補うものとなつていよう。<sup>20</sup>

## (2) 執筆活動の開始

以上の九〇年近いポーレットの生涯において、本稿で注目するのは言うまでもなく、パリでの執筆活動である。中心となる媒体は『黒人世界評論』だが、その創刊の前に月刊紙『アフリカ通信 (La dépêche africaine)』<sup>21</sup>に関わっている。まずはそちらに触れておこう。

『アフリカ通信』は、グアドルーブ出身のモリス・サティノーが一九二八年二月に創刊した新聞である。冒頭で述べたように、戦間期には植民地から少なからぬ者がパリに到来し、さまざまな活動を展開したが、そのなかに「黒人種の利益防衛委員会 (Comité de défense des intérêts de la race noire)」なるものがあつた。サティノーの新聞はこの組織の機関紙という位置づけで、「アフリカ、マダガスカル、カリブ海、アメリカの黒人との通信手段として」創刊された。<sup>23</sup>その背景として、第一次世界大戦後の一九一九年に、パリで「パン・アフリカ会議」が開催されたことを想起するのは無駄ではあるまい。少なくともこの時期には、異なる植民地出身の黒人相互の連帯なり協力なりが意識されるようになってきていた。その意味でここに掲げられた目標は、新しい局面が生まれつつあつたことを示していよう。ちなみに本紙は最後の二頁が英語で、英語圏での出来事を扱っている。

しかし、そうした黒人との連帯が支配者フランスと対峙するという図式は、この新聞が念頭に置いているものではない。同紙のモットーは、「私たちの植民地を防衛すること、それはフランスを強固にする (Défendre nos colonies, c'est fortifier la France)」というものである。それが毎号第一面に、サティノーの名前とともに掲げられ

ている。創刊号に掲載された「私たちの目的と綱領 (Notre but-Notre programme)」には、「文明化された国々 (nations) の植民地化の手法は申し分ないものではまったくない。しかし植民地化そのものは、人道的に必要な企図である」との言葉もみえる。<sup>24</sup>

他所でも縷々記してきたことだが、フランス植民地のなかでもカリブ海植民地は、フランス領であることを積極的に肯定し、フランス人意識を強烈にもつ地域だった。<sup>25</sup> サティノーの姿勢はその典型といえる。戦間期に澎湃と起こった植民地出身者の運動のなかには、支配に批判的立場をとるものもあつたとはいえ、カリブ海出身者に関していうなら、『アフリカ通信』の立ち位置はしごく当然のものであつた。

それはポーレットも同様である。この点を『黒人世界評論』にみる前に、資料状況について付言しておきたい。『アフリカ通信』は、アメリカの大学ネットワークに登録すれば、オンラインで全号を参照することができるようである。対してフランス国立図書館ではごく一部がデジタル化されているにすぎない。<sup>26</sup> パリで刊行されたにもかかわらず、と思えるが、ここには米仏両国における、いわゆる黒人研究の進展の相違、あるいは関心のありようの相違が反映されている感がする。冒頭で述べたように、ナルダル姉妹をめぐる研究が英語圏において蓄積されていることにも、そうした事情が反映されているだろう。

## 二、ナルダル姉妹と『黒人世界評論』の創刊

### (一) 雑誌の目指すもの

『黒人世界評論』は一九三二年一月に創刊された。創刊メンバーにはポーレットとジェインの姉妹のほか、ハ

イチのレオ・サジユ、さらに当時パリにいたクララ・シエパードが名を連ねた。シエパードはアメリカ初の黒人大学であるハーワード大学の教授である。<sup>27</sup> ここにもアメリカの新しい世代との交流が見いだせる。『黒人世界評論』は、宗主国の首都パリで、植民地出身の黒人女性が、主体的に創刊した最初の新聞と位置づけられる。こちらは一九九二年に全六号が一書にまとめて再刊されたので、すべてを読むことができる。<sup>28</sup> 第七号の準備までしながら六号で終わるのは資金難ゆえで、多くの雑誌がそうだったと後にポーレットは述懐している。<sup>29</sup>

それでは本誌は何を目的に創刊されたのだろうか。創刊号の冒頭には編集部の署名で「私たちのやりたいこと」と題する、いわば巻頭言が載せられている。これはポーレット自身の手になるものである。<sup>30</sup> まずは全文を掲げておこう。

黒人種の知的エリートと黒人の友人たちに、彼らの芸術的、文学的、科学的作品を刊行する手段を提供すること。

出版／報道、書物、講演、講義を通してニグロの文明と、黒人種にとって神聖な祖先の地であるアフリカの自然な豊かさに関するすべてを調べ知らせること。

世界中の黒人の間に、国籍の区別なく、知的、精神的つながりを生み出し、それによって互いによりよく知り、慈しみ合い、より効率的に自らの集団的利益を守り、自らの人種を表現していく (illustrate) こと。以上が『黒人世界評論』が目指す三つの目的である。

これらによって黒人種は他の人種のエリートとともに、また真実、美、善の光を受けたすべての者とともに、人類を物質的、知的、精神的によりよくすることに貢献できるだろう。

本誌の標語 (devise) は、

平和、労働、正義のために。

自由、平等、友愛を通して。

こうして、様々な国家に分かれていようとも、一億人を数える黒人は、国家を超えて偉大な民主主義を作り出すだろう。それは普遍的な民主主義の序曲となるのだ。<sup>31</sup>

(傍線は原文大文字)

この文章からは何が読み取れるだろうか。はじめに気になるのは、冒頭から黒人のエリートへの呼びかけにみえることである。これはエリート主義なのだろうか。この点を指摘した小川了は、「黒人種の聖地アフリカ」を謳うことで、カリブ海出身者のエリート意識を排し、アフリカから来た労働者たちとの連帯も重要だと言外に言っている、と述べている。<sup>32</sup>

アフリカ人との連帯については、次に考えることとして、ここではまず仏領カリブ海出身者が大きな影響を受けた、ニュー・ニグロの運動に改めて目を向けておきたい。

二〇世紀初頭には教養を積んだアメリカの黒人運動家の間で、「才能のある十分の一」が残りの九〇％を引き上げるという考えが広められていた。<sup>33</sup> それはエリート主義と批判することもできるが、白人と黒人の間に厳然と優劣がつけられていた時代である。たとえ一部であれ黒人の上層の者が、社会の上位の者に同等と認められることが、全体としての地位の向上の第一歩になるという見立ては、そうした時代を映したものであろう。

実際、当時のフランスに目を転じてフランス人の間でみても、エリートとその他一般の労働者の乖離は大きかつ

た。第一次世界大戦の戦場経験がそれを縮めたという見解もあったが、これは普遍的に支持されているわけではない。むしろ近年の研究では、戦場でそれぞれが自らのアイデンティティを強め、互いの相違が再確認された側面が指摘されている。<sup>34</sup> ポーレットなど『黒人世界評論』の創設者たちが、「才能のある十分の一」という自覚の下に、「世界中の黒人の間に、国籍の区別なく、知的、精神的つながりを生み出」していかうとする決意をもったことは十分に考えられる。

そうだとすると、巻頭言全体を通して違和感を覚える面もある。植民地出身者の書き物なのに、末尾には宗主国であるフランス共和国の標語が踏襲されている。それにこの巻頭言の何が、この時代に向けて新しい意味のあるものだったのか。この点については「黒人種にとって神聖な祖先の地」として、アフリカに言及されていることから考察を続けよう。

## (2) 「アフロ・ラテン人」

いまの私たちからすれば、ポーレットは黒人に分類されるのだから、アフリカを自らの源として認識しているのは当然と思われるかもしれない。しかし当時、フランス領カリブ海の住民は一般に「黒人」とは自認していなかった。では何者と思っていたのか。端的に「フランス人」である。せいぜい「有色のフランス人」であろう。<sup>35</sup> その背景はいささか込み入っている。

時代を遡って一八四八年、フランスで二月革命が起きて第二共和政が樹立されると、植民地の奴隷制廃止が実現する。それと同時に元奴隷たちは、「フランス市民」と位置づけられた。全面的な市民権があったわけではなく、その意味ではもちろん二流市民にすぎないが、本国で男性に限ってとはいえ普通選挙が導入されたのに合わせて、

植民地の元奴隷の男性も国政参政権を得たのである。その後は本国議会に選出された地元出身の議員たちを中心に、本国と同等の市民権の付与をフランス政府に要請する動きが続いていく。<sup>36</sup>同じカリブ海で、早くに独立したハイチが失敗国家となったことも考慮すべきだが、植民地は独立を求めるはずだという固定観念が、見事に覆される一例である。

これらの地では選挙で投票する人びとを育てるためにも、その後の帝国主義時代に植民地化される他の地域に比べて、初等教育の導入や進展が早かった。そこではフランス人が、フランスを主体とした教育を施したのであり、生徒たちはフランス的な知識やフランス人意識を身に着けていった。<sup>37</sup>

しかも奴隷貿易が、奴隷制廃止の二〇年ほど前からほぼ途絶えていたことも忘れてはならない。つまり奴隷植民地にアフリカ人が来ない状況がしばらく続いたのである。そこへ奴隷制廃止とともに、再びアフリカ人が到来するようになる。一八四八年の奴隷制廃止に伴う労働力不足を補うために、改めてアフリカ人が契約労働者として導入されたからである。元奴隷、つまりカリブ海植民地の住民たちはアフリカがルーツとはいえ、奴隷植民地では混血が多かったため、廃止の後にアフリカから直接到来する黒人とは見た目も違っていった。彼らと自分たちは違うという認識は、当然のように生じていた。何より元奴隷たちは、曲がりなりにも市民権を得た「フランス人」である。対して新来のアフリカ人は「外国人労働者」にすぎない。言葉が通じないという面もあっただろう。それはアフリカの黒人を見下す心性に直結したと考えられる。<sup>38</sup>

しかしそうした認識は、パリで徐々に変容していくことになる。ここで『アフリカ通信』創刊号にジェインが寄せた「黒人のインターナショナルリズム」と題する一文を参照しよう。<sup>39</sup>ジェインは「以前はより同化された黒人は傲慢にも有色の兄弟たちを見下していた。自分たちは確かに彼らとは異なる種に属していると信じていたのだ」と正

直に書く（傍線は引用者）。しかし第一次世界大戦を経て、パリでさまざまな出自の黒人が、各々の不幸のなかで苦しむのに接するようになった。他方、いわゆる「ニグロ芸術」を発信し始めるアーティストや上層の者が姿を現す。そうした人びとと交流するなかで、出自や国籍、慣習、宗教などの相違はあるものの、何か一つのもの、つまり同じ人種（すなわち黒人）に属しているという感覚を曖昧ながらもつようになったというのである。

興味深いのは、ジェインがアフロ・アメリカ人 (Afro-American) と並べて「アフロ・ラテン人 (Afro-latin)」という言葉を書き記していることである。<sup>40</sup> 自分たちは、故郷で学んだようにフランス人ではなく、アフリカの要素を内包する存在なのだという気づきのもと、アメリカの黒人に倣ってこう表現したものだろう。これはフランス領カリブ海という、意識の面で濃厚にフランス化された地域出身者にとっては、きわめて大きな認識の転換というべきと思われる。このような変化の背景として、やはりアメリカのニュー・ニグロの運動に接する機会があったことは指摘されよう。

もつとも、ジェインは続けて、「アフロ・アメリカ人であるということ、アフロ・ラテン人であるということは、アフリカの黒人にとって励ましとなり、慰めとなり、模範となることである。白人文明の恩恵が、必ずしも自分の人種の否定にはつながらないことを示すのだ」と記している。ジェインは、自らのアフリカ性に無自覚なままもつていたアフリカ人への蔑視が過ちだったと気づいている。その一方で、社会の上位者としての白人（この場合ラテン系のフランス人）から恩恵を受けた自分たちがおり、自分たちの存在がアフリカ人にとっての模範となる、という一連の上下関係を、おそらくは無意識のうちになぞっているとみえる。時間をかけて刻まれたこうした心性を解き放つのが困難であるのは必然のこととはいえ、この点も見落とさないでおこう。

### 三、「人種意識の目覚め」——ネグリチユードの先駆？

#### (1) 唱えられた「ネグリチユード」

それではナルダル姉妹の思想はネグリチユード思想の先駆なのだろうか。本章では『黒人世界評論』が冒頭でアフリカを掲げていることに関連して、ネグリチユードに焦点を当てることとしたい。

すでに述べた通り、ネグリチユードという言葉こそ使っていないが、この概念はナルダル姉妹に由来することが、いまや研究者の間では諒解事項となつている。多くの研究書が引用するのは、アメリカのジャック・ルイ・ハイマンスによるサンゴールの伝記である。一九七一年刊行のこの書では著者ハイマンスの問いに対し、自分たちに言及なくこの概念がサンゴールらの功績として語られることについて、ポーレットが「私たちはしよせん女ですからね (we were but women)」と答えた<sup>41</sup>と記されている。ポーレットも後に、アメリカの若い学生から手紙で質問があつたことを回想している。<sup>42</sup>

それでは、そもそもサンゴールやセールのネグリチユードはどのようなものだったのか。言うまでもなく、ネグリチユードはフランス語で「ニグロ」を意味するネーグル (negre) に接尾辞をつけて作られた言葉である。蔑視の対象だった黒人の呼称をあえて使うことで、貶められるものを黒人自らが引き受けるという姿勢を示している。貶められることを逆手にとって積極的に肯定しようとする、一種の開き直りの姿勢ともいえる。第二次世界大戦後には、アフリカを共通項とする知識人の間でも文化面での連帯・協力関係を深めて、仏領アフリカの自律に向けた動きに掉さした。<sup>43</sup>

では貶められていた黒人性を引き受けるというのは、具体的にはどのようなことだろうか。彼らの書き物から読

み取れる一面は、サンゴールもセゼールもともに「アフリカ＝未開・野蛮」という図式が前提となった思考を提示していることである。他所でも言及したことだが、サンゴールの書き物には、「理性がヘレネス（ギリシャ、すなわちヨーロッパ）のものであるように、感情は黒人のものである」（「黒人がもたらしうるもの」一九三九年）、あるいは「ヨーロッパの白人はまず論理的で、アフリカの黒人はまず本能的である」（「ネグリチュードとは何か」一九六六年）といった言葉が綴られている。<sup>44</sup> 発行年に注目すれば、一九六〇年のセネガル独立の後にもそうした思考が継続していたことがわかる。

日本でもよく読まれているセゼールの『帰郷ノート』（一九三九年）にも次のような一節がある。「私たちはあなたたちと、あなたたちの理性を憎む。だから早発性痴呆と燃えるような狂気と執拗なカニバリズムこそが、私たちのものだ主張する」。<sup>45</sup> 実際『帰郷ノート』には「黒人」なるものの否定的イメージが書き連ねられるのに気づく。ヨーロッパの人種主義の歴史を緋けば、白人は理性や思考に象徴されるのに対して、非白人は感情や本能など、より自然に近い存在、つまりはより動物に近い存在だと位置づけられてきた。そこには圧倒的な優劣も刻印されている。それに対して以上の両者は、否定的に語られていた「黒人」の劣性そのものを自らの本分だと主張している。つまり、ネグリチュードの担い手たちは、白人と同じ人間だと主張するのではなく、白人に貶められる要素を自分たち固有の価値だと主張することで、自らの存在を高めようとしたといえる。

もう一つ時代背景に触れておくなら、本稿冒頭で述べたように戦間期は植民地への関心が高まり、アフリカに由来するものに注目が集まったときだった。ヨーロッパとは異なるアフリカの感性になるとされた「黒人芸術」は「原始芸術」とも呼ばれた。フランスの黒人史研究の草分けであるフィリップ・ドウィットは、「原始的（primitive）」というの**は必ずしも否定的なニュアンスをもたない、中立の言葉だと指摘する**。<sup>46</sup> 実際これは「最初の／もとの

(original)」という意味で今日でも普通に使われている言葉である。ドウィットは、黒人に本能的、官能的、動物的なものを見るのは確かに人種決定論だとしつつも、このように名指した根底に、フランス社会のアフリカに対する蔑視があったとは必ずしも言えないとしている。そうした見方の延長に、サンゴールらの姿勢を位置づけることもできよう。

仮にそうであったとして、このような思考は、その背後にあるはずのヨーロッパとヨーロッパ外の世界との間に築かれた優劣を、どこまで覆せるものだろうか。このような逆転の思考なるものが、どこまで現実の認識を逆転させられるだろうか、という疑問ももたされる。戦間期は、アフリカの芸術が注目を集めたのみならず、学問の面においてもアフリカに関する研究が進んだ時代だった。フランスの植民地官僚で、民族学や言語学でアフリカ研究を牽引したモリス・ドラフォス、あるいはドイツの人類学者レオ・フロベニウスなどの専門家が、アフリカに関して「黒大陸」の否定的イメージを一掃する研究を発表している。アフリカには文学も歴史も文化もあることが、ヨーロッパ人研究者によって明らかにされていたのである。<sup>47</sup>

そうした時代状況を指摘したうえで、グアドループ出身の作家マリーズ・コンデは、ネグリチユードの作家たちがヨーロッパの作り上げたアフリカ・イメージを「受け入れ」続けていることに疑問を投げかけ批判のまなざしを向けている。幾多の文学を基礎づけたネグリチユードの重要性に触れつつも、「ネグリチユードにおいて確認せざるを得ないのは、ニグロの魂に関するヨーロッパ的ステレオタイプへの同意と受諾」だとも言明している。<sup>48</sup> むろん本稿も、ネグリチユードを上記のことのみ還元し、歴史上もつたその重要性や西洋社会に与えた衝撃を等閑視するものではない。他方でコンデのような批判を目にすれば、それも否定できない側面ではある。<sup>49</sup>

加えて、ネグリチユード運動の中心的担い手であるサンゴールとセゼールが、背負っている文化・歴史的背景を

異にすることも記しておきたい。カリブ海出身のセゼールが、ポーレットのように自らのアフリカ性に気づいたことがあったとして、サンゴールはアフリカ出身であり、自身とアフリカとの関連は自明であろう。とするならネグリチュードに何を託したのか、両者の認識がまったく同じであったとも考えにくい。一般には、セゼールの場合にはアフリカへの回帰がその思想に含まれているのに対し、サンゴールの場合は文化の混淆・混血が思想の主軸だと認識されている。<sup>50</sup>ネグリチュードは一つの定式化された思想とは言い難いことも確認しておこう。

## (2) 「人種意識の目覚め」

では、ネグリチュードの先駆的思想を唱えたとされるナルダル姉妹はどうだろうか。まずはポーレットが『アフリカ通信』に記した一文を参照したい。

この小論では、さまざまな黒人音楽家や俳優へのコメントが記されている。たとえばアフリカの仏領スーダン（現マリ）の俳優のパフォーマンスに言及し、「その情熱の叫びは、肉体の叫びだ」という。あるいはビギン（マルティニックのテンポの速いダンス音楽）の踊り子については、その美しさだけでなく「アスレティック」な面にも言及し、「ニグロのオーケストラ音楽のたけり狂うようなりズムや、それに合わせて腰を揺らしたりひねったりする動きは、疲れを知らない柔軟さを示している。それは他の人種にはほとんど見られないものだ」といった文言もある。<sup>51</sup>こうしたいわば本質主義ともみえる描写が、彼女の主要な主張なのだろうか。

ここで『黒人世界評論』最終号に掲載されたポーレットの論考「人種意識の目覚め」（一九三二年）を取り上げなければならぬ。<sup>52</sup>以下に概要をみておこう。

まずマルティニックにおいて、奴隷制というテーマはタブーだという。本稿第二章でも述べたように、カリブ海

出身者はアフリカ人とは異なるという自意識を強烈にもっている。奴隷の末裔であるものの、アフリカ黒人とルーツを同じくすることが「誇り」だなどという考えはない。しかしポーレットを含め、パリにやってきたカリブ海の人びとは、当地で経験したデラシネの感情から、「黒人の魂」に目覚めていく。アフリカ人は機械的に差別の対象となっているが、自分たちもそのアフリカ人と同じ扱いをされるのであり、そうした状況のなかでの目覚めといえよう。自分たち「カリブ海の者が人種意識に目覚めるには、故郷を離れる必要があった」というわけだ。<sup>53</sup> 論考の前半で、一九世紀のポール・ロレンス・ダンバーやW・E・B・デュボイスから、一九二〇年代のクロード・マッケイらニュー・ニグロの黒人たちまで、アフロ・アメリカ文学の成り立ちをたどっているのは、「歴史的、文化的、社会的観点から、黒人の過去に誇りをもちうる理由を探し始めた」からだという。

アメリカの事例に続けてポーレットは、フランス領カリブ海に関してもまた、一九世紀からの歴史をたどり直し、そうした知的運動の一つの到達点として一九一九年のパン・アフリカ会議を位置づけている。ポーレットはマール・ス・ガーヴィやゴンクール賞を受けたマランの名をあげつつ、戦間期に黒人によって創刊された種々の雑誌にも言及する。のみならず、パリ在住の黒人の学生たちが、黒人の歴史や各自の出身地の歴史に関するテーマを自ら設定して学んでいる状況から、大いなる知的好奇心の高まりを指摘し、そうした知的な面での進展から、アフリカ文明の復権を提唱するのである。

注意したいのは、ここにはヨーロッパにおけるステレオタイプ of 黒人像を讚える姿勢はないこと、同時に、「ラテン文化やいわゆる白人世界への宣戦布告」などの類でもないと言明していることである。「私たちは白人文化に負っているものを全面的に意識しているし、手放すつもりも毛頭ない。そうではなく、この文化の粋を乗り越えようとしている。白人の知識人の力を借り、黒人の全ての友人たちの力を借りて、私たちの仲間に、おそらく世界で

最も古い文明をもつ人種に属しているという「誇り」を与えたい」。

この「誇り (fierté)」にまつわる言葉は、ポーレットの書き物に頻出する単語である。後年のインタヴューでも、この言葉が繰り返し返し使われている。<sup>54</sup> 黒人であることに誇りをもつ、もてるようにすることが彼女の人生を通していかに重大だったか、思われる。その誇りの中身は、極めて知的な探究である。つまりアメリカとフランス、双方における知的な進展をたどり、その相違に触れつつ、アフリカ文明が共通の過去だという、彼女たちカリブ海出身者にとつての新たな認識が表明されているのである。

それではポーレットは、ラテンより「黒人の魂」を強調しているのだろうか。あるいは「アフリカという過去」に回帰しようとしているのだろうか。<sup>55</sup>

先に記した創刊号の巻頭に掲載された共和国の標語は、その意味でも重要である。アフリカ性を否定せず、同時にフランスなどの「ラテン文化」に負っているものも放棄しない、換言すれば、黒人という種に属することを誇りにしつつ、同時に身に着けてきたフランスに根差した教養も大切にする。これはまさにジェインが示した「アフロ・ラテン」という意識に直結するものであろう。<sup>56</sup>

そうであればポーレットの記す黒人の誇りとは、貶められていた黒人性を見直すにとどまらないのではないか。ここには支配者たるヨーロッパのものであれ、劣るとされていた黒人の徴であれ、複数の要素を優劣なく採り入れるという意思が感じられる。それはネグリチユードの思想というよりは、むしろ後の「クレオール性」の議論へと進展していくものにもみえる。<sup>57</sup> 改めて言うまでもなくクレオール性は、一九八〇年代末にフランス領カリブ海において、複数文化の共存を称揚する立場から発信されたものである。ナルダル姉妹の思想は、クレオール性の先駆というべきなのだろうか。

しかし同時にもう一つ、ジェンダーの視点から考える必要があるだろう。「しょせん女」であるがゆえに自分たちの存在が等閑視されてきたとのポーレットの回想に触れたが、彼女たちの思想について「ジェンダー化されたネグリチュード (négritude genrée)」という言葉も使われている<sup>58</sup>。最終章では、この点から読み解かなければならない。

#### 四、クレオール性を超えて——インターセクシヨナリティという視座

##### (1) ジェンダーの視角から

ポーレットは「人種意識の目覚め」で、戦間期にさまざまな雑誌や新聞が黒人の手で刊行されたことに触れつつも、それらはまだ「黒人問題 (la question noire)」に主眼を置いたものとはいえず、世界各地に散らばった黒人の連帯を唱えるものではなかったとする。

ポーレットによれば、「連帯」の必要性をまず認識したのは、カリブ海出身でパリに学ぶ女子学生たちだった。有色の女性は有色の男性に比べて、成功を手にするのが難しい。不利な立場にある女性たちは、男性よりずっと早い時期から、物質的にも精神的にも、人種の連帯の必要性を感じており、そこから人種意識に目覚めていった。「デラシネ」の感情から人種意識に目覚めたという見解は前章でも紹介したが、女性の方がよりその種の感覚を強く感じ、覚醒に近い立場にあったとの認識といえる。そうした声を集約したのが『黒人世界評論』だったのだという<sup>59</sup>。

有色の男性が女性より容易に成功したことの根拠は記されていないが、種々の刊行物の出版や社会運動にかかわる者が男性中心だったことはあるだろう。ルネ・マランのゴンクール賞の受賞はその大きな一例でもある。そもそ

も当時のフランス社会自体が男性優位だったことを、忘れてはなるまい。周知のようにフランスで女性参政権が実現したのは一九四四年、初めて女性がゴンクール賞を手にしたのは一九四五年のことだった。<sup>60</sup> しかも長年、十全な市民として認められず被差別の状態にあったフランス人女性にも、有色人への差別意識はもちろんなあった。とすれば、黒人女性の疎外感には、男性以上のものがあつただろうことは容易に想像できる。

ここで『アフリカ通信』第九号に掲載された、ジェインによる「エキゾチックな人形」<sup>61</sup>を参照したい。ジェインはこのなかで、黒人、とりわけ黒人女性に対するフランス人のステレオタイプを批判している。黒人女性を見るまなざしには、セクシャルなニュアンスが込められており、黒人女性をまさに身体的なものに象徴させているというのである。

ジェインはジョセフィン・ベイカーにも言及する。アメリカ出身の黒人女性で、パリで踊り子として活躍した。意に反してとはいえ、バナナの葉を腰蓑に半裸で踊り、人びとが想像するアフリカやら野生やらを表現したことで一世を風靡したのは、日本でもよく知られている。彼女は白人が黒人女性に託すイメージを体現することで売れた女性だった。より正確には、ヨーロッパ社会の描くイメージに沿ったパフォーマンスを演じることで名声を博したのであり、まさにそうした有色女性に付与されたステレオタイプを象徴する存在となった。

ジェインはジョセフィンが、大きく黒人のイメージを変えたという。それまで黒人は、ストウ夫人の描く黒人奴隷のような従順なイメージで語られてきたのだが、ジョセフィンの登場によって、ステレオタイプの中身がアメリカ的なモダンイズムを含んだものに変わったというのである。要するに黒人は、ヨーロッパ人のまなざしによって作られる客体にすぎない。しかも女性は一般に「見られる性」と位置づけられるが、「エキゾチック」な有色の女性は、より一層そうした側面が強調される存在になったとジェインは記す。今日の言葉でいえば、人種とジェンダーが結

びつけられている状況と要約できよう。ジェインの論は、劣位に置かれる有色人女性からの異議申し立てともいえる。

そうであるなら、先にポーレットの書き物に、身体性や白人の考えるアフリカ性を踏襲する面があったことを記したが、身体性を黒人の特色とするのは、姉妹の観察のごく一部である。身体性の強調は、女性をセクシャルな対象に貶めこそすれ、ステレオタイプを変えることはないし、見る性としての男性、見られる性としての女性という位置関係、あるいは力関係を変えることもない。

ネグリチュードという思想がその後長く注目を集めることもあり、彼女たち自身が女ゆえに横取りされたという思いを抱いたという証言自体は重い。最近刊行の『アフリカ文学講義』を著したアラン・マバンクも、ポーレットが名前を残さなかったことに驚きを覚えると記している。<sup>62</sup> 他方で、後世の私たちがその面のみ過度に注目すると、彼女たちの思想がもっていた奥行きを過小評価することにつながるのではないだろうか。

## (2) クレオール性とジェンダー

以上を踏まえて、クレオール性から考えてみよう。クレオール性を唱えた『クレオール礼賛』では、次のように述べられている。「私たちは、ヨーロッパ人でもなく、アフリカ人でもなく、アジア人でもない。私たちはクレオール人であると宣言する。それは私たちに一つの内面的な態度の問題であろう」。<sup>63</sup> いうまでもなくヨーロッパ人は奴隷所有者の、アフリカ人は奴隷の末裔である。アジア人は、奴隷制廃止後に労働力として導入されたインド人や中国人をさす。さらに前述のように、改めてアフリカ人も労働者としてやってきた。<sup>64</sup> 彼らカリブ海の新しい世代にとっては、もはやアフリカのみが唯一のルーツではない。一人一人が異なる多様な要素を併せもつという認識

の上に、クレオール性の概念は成り立っている。

ではポーレットが存命だったら、クレオール礼賛の宣言に全面的に賛同しただろうか。これが私たちの主張だ、と思っただろうか。『クレオール礼賛』の末尾には、このクレオール性という概念には「不断のダイナミズム」があると記されている。クレオール性のなかに閉じこめるのは、その構成原理に反することになるし、ひいてはそれを否定することになるというのである。<sup>65</sup>その不断のダイナミズムとして載せられているのは、次のような事例である。

ドイツ人の夫とハイチ人の妻から北京で生まれ北京で暮らす息子は、いくつもの言語、いくつもの歴史の間に引き裂かれ、モザイク模様のようなアイデンティティのほとぼしる多義性にとられるだろう。彼はその多義性を〔中略〕その複雑さそのままに考えなければならぬだろう。彼はクレオール状態にあるのだ。<sup>66</sup>

この文章は、単に「混血」を称賛しているのではなく、人びとのあり方は時間とともにダイナミックに変容しているものであり、文化的環境や個々人の意識、それが生活や生そのものに反映される様を語っていると捉えるべきだろう。

ただし注意すべき点がある。ここに例示されているのは、ヨーロッパ人の夫と旧植民地出身の妻、そして子どもは男の子である。つまり夫は支配者を、妻は被支配者を、子どもは男性を表象していると捉えられる。これはヨーロッパに形成された人種概念における優劣を、そのまま映し出すものではないだろうか。この点を指摘した政治思想家のフランソワーズ・ヴェルジェスは、ドイツ人の夫という想定は、人種論で最上位に位置づけられたアーリア人を

体現するでも思ったのか、と皮肉っている。ヴェルジェスが関連して、「クレオールは男性形に活用する」<sup>67</sup>と述べているのは、的を射たものではないか。おそらくポーレットは、ヴェルジェスの指摘により共感したに違いない。

本章冒頭で、ポーレットが女は男より成功に遠く、まずは女性が人種意識に目覚めて連帯の必要性を感じたと記していることに触れたが、戦間期パリの黒人女性の主体性を論じたクレア・オベロン・ガルシアは、ポーレットの論考のなかでここが「最もラディカルな主張」だとする。そしてこうも述べている。白人社会から排除され、ステレオタイプ化されたパリの黒人女性は、エスタブリッシュされたアンテューユの男子学生の文化に合わせることもできなかつた、「そうしたパリの黒人女性の挑戦は、人種、ジェンダー、階級の挑戦」<sup>68</sup>だった、と。

こうした視点からするならば、ガルシアの指摘を待つまでもなく、第三波フェミニズム以来語られる「インターセクショナルティ（交差性）」という言葉を想起させられよう。一人の人間に複数の差別の要素が交差している状況に対して、「複合差別」の意味で使われるようになった言葉である。<sup>69</sup>それではこの最後の「階級」について、ポーレットの立ち位置はどのようなものだろうか。

### (3) 二重の抑圧のなかで

すでに述べたように、ナルダル姉妹は裕福な出身だった。『黒人世界評論』の目指すところにも、すべての黒人との連帯を掲げつつ、まずはエリートから、という姿勢も読み取れた。ポーレットの論考「黒人意識の目覚め」の末尾にも、以下のように記されている。「パリで目覚めた黒人たちは自らの人種の将来に、もはや絶望しない。黒人のなかにはまだ眠っている者たちもいるが、目覚めた黒人は遅れた兄弟たちに (ces frères attardés) 救いの手を差し伸べ、彼らが黒人の文明を理解し、よりよく愛するよう、力を注ぐだろう」<sup>70</sup>。これもエリート主義ないし、

上からの宣言だと批判されるものであることは否めまい。

他方、彼女には『流浪 (En exil)』と云う『アフリカ通信』(一九二九年一月一日)に掲載された短編がある。<sup>71</sup> 当時パリには、ナルダル姉妹やルネ・マランのような知識人ばかりでなく、貧しい階層の人びとも植民地から労働者としてやってきていた。主人公はそうした一人であるマルティニック出身のエリザ。リューマチを患いながらパリの洗濯屋で働く年配の女性である。むろん資力もなく、ゆっくりと散歩したり仲間たちとおしゃべりしたりすることもできない。パリ人はこわばった顔つきで厳しい目をしていて、エリザが過ごした優しさや幸せに満ちたマルティニックでの生活とは、根底から違う。ナルダル姉妹再評価の先鞭をつけたシャイリーン・ルイスは、異郷のパリでつらい毎日を送るエリザの苦境を通して、黒人女性の流浪、疎外、孤独、絶望といったものをこの短編は描き出したと評している。<sup>72</sup>

ここにカリブ海の明るい生活と、パリの暗い閉ざされた生活という対比を読み取ることもできるだろう。しかし、植民地とヨーロッパの生活を明と暗とし、明るいカリブ海、ひいては明るいアフリカの称揚にとどまるならば、そして、アフリカを称揚することからポーレットの思考を、単なるアフリカという過去への回帰に帰結するものとみるならば、その広がりを見落とすことになりかねない。

むしろ、ソルボンヌに学びジャーナリズムで活躍するポーレットが、こうした小説を書いたこと自体に注目すべきではないか。ポーレットはいかに裕福な出自であれ、異郷のパリでの経験から、自らの黒人性、そのもつアフリカという自らの起源に目覚めたという経緯があった。そこには被差別の体験もあつただろう。人種差別が起きる現場では、差別される者が差別する側に自己同一化し、差別の要素をもつ同胞と自らを区別して、社会上昇を図ろうとするケースがしばしば見受けられる。<sup>73</sup> しかしポーレットは、明らかにそうした方向を向いてはいない。憔悴し

た年配の黒人女性すら、パリ人のエキゾチシズムにさらされていることを見落としてもいない。ポーレットのまなざしに、異なる出身のエリザのような女性を包摂するものがあることは、ガルシアのいう「階級の挑戦」につながるものであり、先に言及したインターセクシヨナリティの意識に通じるものがあるとみてよいのではないか。仮に貧富を超えた連帯などというものが、抽象的なレベルにとどまるとしても、である。

それでは植民地主義については、どう捉えていたのだろうか。貧困がこれにのみよるのではないにせよ、当時の社会の上下関係を決定づける、主要な要素であったことは確かだろう。じつはポーレットは反植民地主義とは対極の立場にあった。後年のインタビューでも、植民地主義に抗して立ち上がるという考えは一切なかったと明言し、独立などは愚かな (stupid) 考えだと発言している。<sup>75</sup> 何かに戦闘的であろうともしなかったとし、それに関しては、パリで警察に迫害されないようにしたことや、雑誌の刊行に植民地省から資金の一部を得られるようにしたなどの理由もあげているが、<sup>76</sup> それらは反植民地主義でない理由にはなるまい。

一九三一年開催の「国際植民地博覧会」にあたっては、『植民地ガイド』でマルティニックについて執筆をしている。<sup>77</sup> さしたる影響力はなかったとはいえ、この催しには「植民地博覧会には行くな」と題した反植民地博覧会まで開かれたことを考えると、そのフランスへの傾倒ぶりは際立っているといわざるをえない。ナルダル姉妹の「融和主義的傾向をブルジョワ的的同化主義」として批判する同郷の者たちが、異なる雑誌を刊行するなどしたことも、すでに先行研究が指摘している。<sup>79</sup>

しかしこうした姿勢は彼女たちの思想の「汚点」であり、非難すべきことなのだろうか。ここで改めてジェンダーの視角から考える必要があると思われる。もともとこのカリブ海の奴隷植民地は、歴史的にも家父長的で女性蔑視の強い地域である。それがどう形成されたかを論じる余裕はないが、<sup>80</sup> 女性には植民地とジェンダーという、いわば

二重の抑圧があった。仮に植民地支配を逃れたとしても、ジェンダーの抑圧はそれとは別次元の問題である。人は遠くからのしかかる抑圧よりも、身近で起きる抑圧により敏感なものである。カリブ海の女性にとって、より身近で直接的な抑圧は、ジェンダー関係から生じるものだったと考えられる。

ここで再度、『黒人世界評論』の巻頭言でフランス共和国の標語が雑誌の基本とされたことに立ち戻るのは、無駄ではあるまい。自由や平等といった価値を掲げたフランス共和主義が、抑圧を打破する思想の軸となりえたこともあったとは考えられないだろうか。<sup>81</sup>

フランス共和主義が、その理念のもつ普遍性ゆえに批判の対象になりにくいことは、筆者もすでに指摘したところである。そして皮肉にも、それは植民地主義を含みもつものでもあった。<sup>82</sup>ナルダル姉妹はこの点には無自覚だっただろうけれど、それでもジェンダーにせよインターセクショナリティにせよ、そうした言葉なり概念なりが存在しない時代である。遠いカリブ海植民地から女性が宗主国に来て大学に通うことなど、およそ普通でなかった時代でもある。そうした時代に、現代にも通じるこれらの論点を自覚し、そのためにこそ文筆や教育を通じて活動したナルダル姉妹の先駆性は、いま改めて歴史に刻まれてよいのではないか。

### おわりに

第二次世界大戦後、マルティニック出身でアルジェリア独立戦争（一九五四―一九六二年）にかかわったフランツ・ファノン<sup>83</sup>は、次のように書いている。

一九三九年の戦争以前、すべてのアンティル人（カリブ海の人びと）は、アフリカ人に対する優越性を確信していたのみならず、根本的な相違を信じていた。アフリカ人はニグロであり、アンティル人はヨーロッパ人であったのだ。<sup>83</sup>

私たちには、この言葉が必ずしも現実ではないことはもうわかる。本稿でみてきたように、ポーレットはここに言われる「すべてのアンティル人」には含まれない。ポーレットは、すでにこうした目覚めを体験していたからだ。ただポーレットも、かつてはこうした考えをもっていた。セゼールにせよナルダル姉妹にせよ、あるいは後のファンにせよ、カリブ海植民地出身者はフランスという異郷での生活を体験し、アフリカ人やアフリカ系の人びとの思想に触れることで、同じような覚醒をしていったと言えらるだろう。これまで語られることはなかったものの、ポーレットはそうした人びとの先駆的な位置にある一人である。ポーレットが、一九一三年生まれのセゼールより一七歳年長で、より早くパリに出て言論活動を開始していたことを思い起こしておこう。

ファンはさらにセゼールが、「ニグロであることは素晴らしい」と言ったと記す。<sup>85</sup>しかしこの点でもまた、ポーレットは違う。彼女にとってニグロ性≡黒人性は自身の一部にはなったものの、学び育んできたヨーロッパ性を脇において、ニグロ性を第一に称えることはなかった。加えて宗主国で知的活動をするなかで、女性としての意識もそれに劣らずあったことを忘れてはならない。彼女の思想はネグリチュードの先駆というに収まらないものであったし、クレオール性すら超えて、二一世紀の今日を先取りする視線をもっていた。そのことは繰り返しおきたい。それでは今日、ポーレットをどのように評価できるだろうか。本稿を閉じるにあたり、改めて以下の二点を記しておこう。本稿第一章で述べたように、ポーレットは第二次世界大戦後にマルティニックで月刊紙『市民としての

女性 (*La femme dans la cité*)』の刊行を始めた。<sup>86</sup>一九四四年、ドゴール政権下で女性参政権が実現すると、それはすでに男性に国政参政権があったカリブ海植民地の女性にも適用された。ポーレットの新聞は、マルティニックの女性たちに政治意識の涵養を説き、能動的な政治参加を促すと同時に、社会問題にも主体的にかかわるよう呼びかけるものである。アネット・ジョセフ・ガブリエルは、同紙は海外県の女性が小説『流浪』の「物言わぬエリザ」のようにならないことを目指したと読み解いている。<sup>87</sup>

そうだとすると、この戦後の新聞は女性についていかに語っているのか。それが一点目である。一九四五年一月の創刊号には、それを紐解く記述がある。

社会的なことは、生活の側面として誰よりもまず女性に関係する。社会的義務という点では、女性は男性と同じだし、個人的存在としても男性同様、女性は知的で自由である。しかし自由だとはいえ、社会的存在としては、女性は人間社会の役に立つよう務めなければならない。また男性と同じく、女性も人類の進歩に貢献すべきだが、男女の間には身体的、心理的な相違があるので、この貢献も異なるものとなる。だからといって、必ずしも価値が低いわけではない。違いがあるだけである。女性はそうした貢献を果たすことで、女性としての使命に忠実であり続けるだろう。<sup>88</sup>

男女の相違を前提とするこうした書きようは、女性は女性に生まれるのではなく、女性になると唱えた同時代のシモーヌ・ド・ボヴォワールとは異なるトーンをみせる。しかし女性参政権が実現したものの、性差が本質的なものと考えられたゆえに、男女間のさまざまな差別や不平等が当然視されていた時代である。そのようななかで彼女

が女性の権利を求め、女性の社会へのかかわりを主張したことの意義自体は、否定すべくもないであろう。男女の性差を前提とした時代、女性として、植民地出身者として、有色人として重層的な差別を被る立場から、単に差別の告発をしたのではなく、抑圧される女性たちに積極的に働きかける言論活動を展開したポーレットは、やはり時代の先端を行く女性だったことは間違いない。<sup>89</sup>

第二に、ポーレットが黒人である誇りを繰り返し口にすると同時に、混血を「アンティューユの人格 (personnalité antillaise)」とみなしている点である。死後出版のインタビューでもこのことは顕著に読み取れる。彼女のいう混血の要素は、アメリカの黒人から得たもの、いわゆる西洋から得たもの、そして何よりもカリブ海地域 (les Antilles) 自体に負うもので、「混血もまた私たちの文化なのです」と述べている。<sup>90</sup>

アメリカやカリブ海、あるいはアフリカの黒人たちが自己主張を始めた二〇世紀前半、パンアフリカニズムにつながる運動にかかわる者のなかには、すべての人種の平等を唱えながら混血というあり方を忌避していた者もある。<sup>91</sup> それに対して混血を重視したのには、「アフロ・ラテン」という認識があるだろう。

ここではさらに全六号を合わせて復刊された『黒人世界評論』の序文を参照したい。執筆者はナルダル姉妹のいとこ、レイニトマ・アシルである。アシル自身、同誌に執筆もしていたが、生まれつつある人種意識を涵養する仏領カリブ海出身の書き手たちについて、後のネグリチュードにつながる独自の色合い (accents) を『黒人世界評論』に見出したとし、次のように記している。「これらの作家たちの生物的・文化的混血、フランス市民権、いかなる人種の基準からも自由であること、さらには彼らの生活環境。以上が自然に彼らを白人世界とある種の協力関係に導いていった。白人との協力なしには、彼らはいかなる形であれ政治的には存在しえない (aucune existence politique) からいふべき」。

要するにアシルは、おそらくは自身も含めてこの地の人びとが反植民地主義に向かわない一つの要因として、仏領カリブ海の混血状況、あるいは通常の人種の基準に収まらない状況を位置づけている。こうした視角をポーレットが自覚していたかはともかく、その反植民地主義の欠如をこのような観点から読解するのは、興味深い視点でもある。

蛇足ながら、すでに述べたようにネグリチユードの中心人物の一人、サンゴールも混血を唱えたが、彼の場合はヨーロッパとアフリカとを対比的に捉えた上での混血だった。政治状況まで含めて考えれば、ポーレットのいう混血がサンゴールのそれと異なるものであることは、容易に諒解されよう。第二次世界大戦後のマルティニックとセネガルが異なる道をたどったことも、またしかりである。

以上にみてきた多面的なポーレットの思想は、どのようにまとめられるだろうか。アシルは姉妹について、アフリカの遺産、家庭の教育、クレオール文化、大学での学び、そしてパリの粋、これらの要素が混ざり合った個性(Personalite)をもっていたと評している。<sup>93</sup> 戦間期パリで活躍した黒人たちをテーマに読み解いたジェニファール・ポイティンは、ナルダル姉妹に「黒人、カトリック、植民地出身者、フランス人、人道主義者、国際的、そして女性」という単語を付している。<sup>94</sup> カトリックというのは、カリブ海植民地には本国で第三共和政以降に進められた世俗化の動きが及ばなかったため、キリスト教信仰が今でも根強いことがある。姉妹の言論活動のなかで、キリスト教が何らかの位置を占めるわけではない。ただ、少なくともカトリックは、近世においてはフランスの一つの軸となるものであったし、姉妹がクラマールに開いた「サロン」というあり方は、まさに近世の社交のありようでもあった。彼女たちが「フランス人」だというのは、それらを含めてフランスの歴史的要素を内包しているという意味だ

と捉えることも可能だろう。<sup>95</sup>

今日、マルティニックには、「ポーレット・ナルダルをパンテオンに」というNPOがある。<sup>96</sup> 周知のようにパンテオンは、フランス革命以降、共和国の英雄を祀る場として機能している。NPOの設立は二〇一八年で、近年のポーレット研究の高まりを受けてのことに思われる。こうした運動が実を結ぶか否かはさておき、彼女をはじめナルダル姉妹をめぐる研究は、あるいは同時代を生きた女性たちの研究は、植民地史やジェンダー史の進展とともに今後さらに深められるに違いない。<sup>97</sup>

- 1 第一次世界大戦と植民地についてはさしあたり以下を参照されたい。小川了『第一次大戦と西アフリカ——セネガル歩兵とは何だったのか?』刀水書房、二〇一五年。拙著『アフリカを活用する——フランス植民地からみた第一次世界大戦』人文書院、二〇一四年。
- 2 戦間期の芸術に関しては以下を参照。柳沢史明『ニグロ芸術』の思想文化史——フランス美術界からネグリチュードへ』水声社、二〇一八年。天野知香『装飾と「他者」——両大戦間フランスを中心とした装飾の位相と「他者」表象』ブリュッケ、二〇一八年。また「狂乱の時代」については近年、再考を促す研究がある。Myriam Juan, *Les années folles*, Paris, PUF, 2021; Jean-Yves Le Naour, *1922-1929 : les années folles ?*, Paris, Perrin, 2022.
- 3 植民地出身者の手になる新聞や雑誌はさしあたり以下を参照。Carole Sweeney, "Resisting the Primitive: The Nardal Sisters, *La Revue du monde Noir* and *la Dépêche africaine*", *Nottingham French Studies*, 43(2), 2004, p. 48. また以下が戦間期を見わたしたびつとつ有益である。Philippe Dewitte, *Mouvements nègres en France 1919-1939*, Paris, L'Harmattan, 1985; 中村隆之『環大西洋政治詩学——二〇世紀ブラック・カルチャーの水脈』人文書院、二〇二二年。
- 4 ちなみにこの時期、在パリのフランス領カリブ海出身者は、およそ二万五〇〇〇人を数えた。 Cf. Philippe Dewitte, "Le rouge et le nègre", *Hommes et migrations*, 1257, 2005, p. 34.
- 5 以下に主要な著作を掲げたい。 Jacques Louis Hymans, *Leopold Sedar Senghor: an Intellectual Biography*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 1971; Georges Ngaly, *Aimé Césaire: un homme à la recherche d'une patrie*, Dakar/Abidjan, Nouvelles éditions

- 7 africanes, 1975; Dewitte, *op.cit.*
- 8 フランスにおける黒人研究が活発化したのは二〇〇五年のいわゆる「郊外暴動」を契機とする。 Cf. Geraldine Faes et Stephen Smith, *Noir et Français*, Paris, Editions du Panama, 2006.
- 7 本稿の研究の先駆者には次の論者がある。Shireen K. Lewis, 「Gendering Negritude」; Paulette Nardal's Contribution to the Birth of Modern Francophone Literature, "Romance Languages, 11, 2000, repris dans *Race, Culture, and Identity: Francophone West African and Caribbean Literature and Theory from Négritude to Créolité*, New York, Lexington Books, 2006. ナルダル姉妹研究の第一人者になる次の著作は、ナルダル姉妹とエム・セゼールの妻ジャンヌをめぐっての論考である。その一部の英訳を掲載している。 Tracy Denean Sharpley-Whiting, *Négritude Women*, Minneapolis, University of Minnesota Press, 2002. 先に引用した次の論文は、ケイト・スホラー、黒人性「混血なまじり」に論じている。Sweeney, *op.cit.* 次は黒人女性の主体性を論じたもの。Claire Oberon Garcia, "Remapping the Metropolis: Theorizing Black Women's Subjectivities in Interwar Paris", Félix Germain and Silyane Larcher (ed.), *Black French Women and the Struggle for Equality: 1848-2016*, Lincoln and London, University of Nebraska Press, 2018. 次の論考はおおむね第二次世界大戦以後の活動に焦点を当て、海外県(植民地)の「市民」について論じている。 Annette K. Joseph-Gabriel, "Paulette Nardal: Martinican Women as Political Protagonists in the Overseas Department", *Reimagining Liberation: How Black Women Transformed Citizenship in the French Empire*, Urbana, Chicago and Springfield, University of Illinois Press, 2020. フランス語の最新論文では、英語圏から研究が始まったフランスを含め簡潔に研究史が整理されている。同時にネグリチュードに収まりあらないナルダル姉妹の思想の側面を指摘している。Corinne Menée-Caster, "Les sœurs Nardal dans le Paris des années 1930: une généalogie féminine de la négritude ou du diversel ?", Erick Noël (dir.), *Paris créole: son histoire, ses écrivains, ses artistes XVIII<sup>e</sup> - XX<sup>e</sup> siècles*, La Grèche, Presses universitaires Nouvelle-Aquitaine, 2020. なお知見のかなり日本語では、事実誤認もあるものの次が最も早くナルダル姉妹に言及している。森あおむ「ネグリチュード(黒人精神)と黒人女性作家の意識——ナルダル姉妹からトニ・モリスンへ」見玉実英、杉野徹、安森敏隆編『二〇世紀女性文学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇七年。その他、以下で論じられている。小川了『黒人世界評論』から『ブレザンス・アフリケース』へ『アフリカ研究』第九四号、二〇一八年。ドミニク・ヘルテ、福島亮訳『黒人世界評論』と『正当防衛』——意識を自覚めさせる二つの武器としての雑誌』澤田直、野崎欽編『女性・戦争・植民地——両大戦間期フランスの表象』水声社、二〇一五年。
- 8 Philippe Grollemund, *Fiertés de femme noire: entretiens/mémoires de Paulette Nardal*, Paris, L'Harmattan, 2018.
- 9 先行研究における Jane (Jeanne) の日本語表記は統一されていないが、本稿では「ジェーン」で統一する。ジェーンは姉妹の四番目である。 Cf. Grollemund, *op.cit.*, p. 57; Emily Musil Church, "In Search of Seven Sisters: A Biography of the Nardal Sisters of

- 10 Martinique", *Collaio*, 36(2), spring 2013. cf. T. Denean Sharpley-whiting, "Femme négritude: Jane Nardal, "La Dépêche africaine, and the Francophone New Negro", *Souls: Critical Journal of Black Politics & Culture*, 2(4), 2000.
- 11 拙著『人種主義の歴史』岩波新書「二〇二二年を参照された」。
- 12 Grollemund, *op. cit.*, p. 19.
- 13 T. Denean Sharpley-Whiting, "Introduction: On Race, Rights, and Women", Paulette Nardal, *Beyond Negritude: Essays from Women in the City*. (Translated with an introduction & notes by Sharpley-Whiting), New York, State University of New York Press, 2009, p. 2.
- 14 インタヴューの書には一九二〇—一九二二年)とする家族の写真が掲載されているが、ジェインはすでにパリにいて不在だと記されている (Grollemund, *op. cit.*, p. 45)。
- 15 サロンは一九二九—一九三四年まで開かれた。 Cf. Dewitte, *op. cit.*, pp. 217-223. スルテ前掲論文「二七—二八頁」。
- 16 Grollemund, *op. cit.*, p. 15.
- 17 ジェインはロモッタに手紙を書いて、ポーレットとの共訳で彼の『ニトー・ニタロ』(一九二五年)を翻訳する許可を得たものの、出版には至らなかった。 Cf. Sharpley-Whiting, "Introduction", *op. cit.*, p. 2.
- 18 Grollemund, *op. cit.*, p. 55.
- 19 *Ibid.*, p. 19.
- 20 Joseph-Gabriel, *op.cit.*, pp. 57-59.
- 21 Grollemund, *op. cit.* およそ二〇一八年という刊行の時期は、インタヴューを受けた一九七〇年代よりも、ポーレットにより注目される時だったのではないだろうか。
- 22 先行研究では『アフリカ速報』と訳されているが、"dépêche"は必ずしも「速報」ではなく、「通信」の意味もある。本紙は基本的には月一回の発行で、速報が目的ではないと考えられることもあり、本稿ではこの訳語を使用する。
- 23 フランス国立図書館の書誌によれば、同紙は一九三二年まで続いた後、一九三八年にも刊行され、第二次世界大戦後にも復刊して一九五六年まで続いている。戦間期に創刊されたものとしては、例外的に生き延びたことになる。(Center for Research Libraries Catalogue, <https://catalog.ctl.edu/Record/6f49809-0fde-5c1d-d13d-9f1dc56b7230>)
- 24 Sharpley-Whiting, "Femme négritude", *op.cit.*, p. 10.
- 25 *Ibid.*
- たとえば拙著『フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、二〇〇二年、二七三—二七八頁。

- 26 デジタル化されたなかで最も古いのは一九二八年一〇月の第八号で、同紙の体裁などについてはこれを参照した。
- 27 Garcia op.cit. p.219.
- 28 *La Revue du monde noir*(*The Review of the Black World*): 1931-1932, *collection complète*, no. 1-6. *La Revue du monde noir*.  
Jean-Michel Place, 1992.
- 29 Grollemond, *op. cit.*, p. 57.
- 30 *Ibid.*, p. 50.
- 31 *La Revue du monde noir*, *op.cit.*, s.p.
- 32 小川前掲論文、四〇頁。
- 33 これは北部の白人慈善家たちの考えで、デュボイスによって人口に膾炙されるようになったものである。たとえば以下を参照。  
Emanuel Nidi, <Rien pour la Révolution, tout par l'éducation>: 'The Talented Tenth at the Second Pan-African Congress',  
*European Journal of American Studies*, 18(2), 2003. 有光道生「夢と現実のルネサンス」『ハーレム・ルネサンス』松本昇編『ハー  
レム・ルネサンス——(ニユー・ニヴロ)の文化社会批評』明石書店、二〇二一年、四〇頁。この考えのもつエリート主義も指摘  
された。
- 34 Cf. Nicolas Mariot, *Tous unis dans la tranche ? 1914-1918, les intellectuels rencontrent le peuple*, Paris, Seuil, 2013. 拙稿「フラン  
スにおける第一次世界大戦研究再訪」『武蔵大学人文学会雑誌』第五五巻第二号、二〇二四年、三八二―三八三頁。
- 35 Mence-Caster, *op.cit.*, pp. 112-113.
- 36 前掲拙著『フランス植民地主義の歴史』第一章。
- 37 Cf. Yvette Faraudière, *Histoire de l'école en Martinique: nos matres d'école*, Paris, L'Harmattan, 2021. フランツ・ファンンは  
一九五二年に刊行した『黒い皮膚・白い仮面』のなかで、「われらが祖先「コール人」と学校で習ったと記している(海老坂武、加  
藤晴久訳、みすず書房、一九七〇年、九九頁)。
- 38 拙稿「連鎖するディアスポラ——フランス領カリブ海からのまなざし」『武蔵大学人文学会雑誌』第五二巻第一・二号、二〇二一年  
二月、三一―四頁。
- 39 Jane Nardal, "Internationalisme noir", *La Dépêche africaine*, 15 février 1928, repris en anglais dans Sharpley-Whiting, *Négritude  
Women*, *op.cit.*, pp. 105-107.
- 40 *Ibid.*, p. 106.
- 41 Hymans, *op. cit.*, p. 36.

- 42 この若い学生がハイマンズと思われる。ポーレットは、その後アフリカ文学者リリアン・ケストルット (Liljan Kesteloot) が『黒人世界評論』とクラマールのサロンの役割に注目し、セゼールやサンゴールがそれを認めるに至ったと述べているが、文献は言及されてはいない。Grollemund, *op.cit.*, p. 96. また日本でも公開された映画『マルティニットの少年』(Joseph Zobel, *Rue Cases-Negres*) の原著者が、彼女を「ネグリチユード」の名付け親だと言ったことも語っている。象徴的にどういう意味であろうか。Ibid., p. 98.
- 43 ネグリチユードについてはさしあたり以下が有益である。アラン・マバンク、中村隆之、福島亮訳『アフリカ文学講義——植民地文学から世界文学へ』第二講「ネグリチユードとは何か」みすず書房、二〇二二年。
- 44 前掲拙著『人種主義の歴史』二二三—二三四頁。
- 45 Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal*, Paris, Présence africaine, 1983, p. 27. (砂野幸稔訳『帰郷ノート』植民地主義論』平凡社 (平凡社ライブラリー) 二〇〇四年、五四頁。訳文は変えてある。)
- 46 Dewitte, *op.cit.*, p. 234.
- 47 『黒人世界評論』第五号には、ドイツ語から仏訳されたレオ・フロベニウスの論者が掲載されている。Léo Frobenius, "Le spiritisme dans l'intérieur de l'Afrique", *Revue de monde noir*, *op.cit.*, pp. 275-280. ただしフロベニウスに比べてヨーロッパ人の白人の優位は前提されていない。Cf. Marc Michel, "René Maran et Blaise Diagne: deux négritudes républicaines", *Présence africaine*, 187/188, janvier 2013, p. 158.
- 48 Cf. Liljan Kesteloot, *Les écrivains noirs de langue française: naissance d'une littérature*, Bruxelles, Université libre de Bruxelles, 1963.
- 49 マリーム・コンテ、三浦信孝編訳『越境するクレオール——マリーム・コンテ講演集』岩波書店、二〇〇一年、一五〇—一五二頁。クレオール性批判は以下がすでに訳出されている。マ・マ・マザマ、星椋守之訳『クレオール性を讀める』批判』『現代思想』第一二五巻第一号、一九九七年。
- 50 Kesteloot, *op.cit.*, ch. IX, 砂野幸稔「エム・セゼール小説」エム・セゼール前掲書、二六五—二六六頁。
- 51 Jennifer Anne Boitín, "In Black & White: Women, *La Dépêche africaine*, and the Print Culture of the Diaspora", in *Colonial Metropolis: The Urban Grounds of Anti-Imperialism and Feminism in Interwar Paris*, Lincoln and London, University of Nebraska Press, 2010, pp. 144-145. 本論文は二〇〇五年刊行の論文に大幅な加筆修正が施されたものと見られる。Boitín, "In Black and White: Gender, Race Relations, and the Nardal Sisters in Interwar Paris", *French Colonial History*, vol. 6)
- 52 Paulette Nardal, "Éveil de la conscience de race", *Revue de monde noir*, *op.cit.*, pp. 343-349.
- 53 かつした側面からデュアヌボラを軸に読み解いたのが、注67で言及したスウィニーの研究である。Cf. Sweeney, *op.cit.*

- 54 Cf. Grollemund, *op.cit.* 『黒人女性の誇り (*Fierté de femme noire*)』というタイトル自体、それをよく表している。
- 55 Dewitte, *op.cit.*, p. 262. 中村隆之「ブラック・モダニティ——両大戦間期パリの黒人運動とハーレム・ルネサンス」松本前掲書『ハーレム・ルネサンス』一六八—一六九頁。中村前掲書、三九—四五頁。
- 56 ポーレットは「アフロ・ラテン」という言葉は使わないが、それは彼女がこの概念を取り入れなかったことを直接意味するとは考えにくい。妹へのライバル意識というのは判断しがたいが(注97参照)、後述のように、むしろこの言葉では彼女の思想を包摂しきれない面があったと考えられなйдらうか。
- 57 最新のフランス語の研究ではそれを「多様性 (diversité)」という言葉で表現している。「普遍性 (universel)」の対語としたものでなく、
- 58 Mence-Caster, *op.cit.*, p. 117.
- 59 *Ibid.*, p. 109. ただし同論文は、やうした見方に立つものではない。
- 60 P. Nardal, *op.cit.*
- 61 一九四四年の業績についてエルザ・トリオレ (Elsa Triolet) が一九四五年に受賞したのが最初である。Cf. Académie Goncourt, <https://www.academiegoncourt.com/tous-les-laureats-prix-goncourt> (二〇一五年一〇月三一日閲覧)
- 62 Jane Nardal, "Pantins exotiques", *La Dépêche africaine* (15 Octobre 1928), repris en anglais dans Sharpley-Whiting, *Négritude Women*, *op.cit.*, pp. 108-113.
- 63 マバンク前掲書、八三頁。同書はポーレットとともに忘れられた女性として、セゼールの妻シュザンヌの名を挙げている。彼女について近年、再評価が進んでいる。
- 64 Jean Bernabé, Patrick Chamisoan et Raphaël Confiant, *Eloges de la créolité*, Paris, Gallimard, 1993, p. 13. (恒川邦夫訳『クレオール礼賛』平凡社、一九九七年、一三頁。訳文は変えてある。)
- 65 これらの人びとについては、前掲拙稿「連鎖するディアスポラ」を参照されたい。
- 66 Bernabé et al., *op.cit.*, p. 53. (前掲『クレオール礼賛』八五頁。)
- 67 *Ibid.*, p. 52. (同書、八三—八四頁。)
- 68 Françoise Vergès, "Métissage, discours masculin et déni de la mère," in Maryse Condé et Madeleine Cottener-Hage, *Penser la créolité*, Paris, Karthala, 1995, pp. 82-83. ウェルジュエスの指摘は、エマアール・グリッサンの提唱した「クレオール化 (créolisation)」に由来する。
- 69 García, *op.cit.*, pp. 219-220.
- 70 *Ibid.*, p. 216. インターセクシヨナリティに関してはさしあたり以下を参照。パトリシア・ヒル・コリンズ、スルマ・ビルゲ、下地ロー

- 70 レンス吉孝監訳、小原理乃訳『インターセクショナルリテイ』人文書院、二〇二一年。  
 P. Nardal, "Éveil de la conscience de race", *op.cit.*, p. 349.
- 71 Paulette Nardal, *En Exile*, repris en anglais dans Sharpley-Whiting, *Négritude Women*, *op.cit.*, pp.116-118.
- 72 Lewis, *op.cit.*, p. 58.
- 73 前掲拙著『人種主義の歴史』終章を参照。
- 74 Boitun, *op.cit.*, p. 145.
- 75 Grollemond, *op.cit.*, pp. 46, 55.
- 76 *Ibid.*, p. 151.
- 77 Mlle Nardal et al., *Guides des colonies françaises: Martinique Guadeloupe Guyane-St Pierre Miquelon*, Société-d'éditions-  
 géographiques-maritimes-et-coloniales, 1931.
- 78 Lewis, *op.cit.*, p. 58; Vincent Bollenot, "« Ne visitez pas l'Exposition coloniale! » la campagne contre l'Exposition coloniale  
 internationale de 1931: un moment antimperialiste", *French Colonial History*, 18, 2019.
- 79 砂野前掲論文「二五五頁」。
- 80 元は博士論文として提出された次の研究がその点に関する古典となっているので参照された。Arlette Gautier, *Les sœurs de  
 Solitude: femmes et esclavage aux Antilles du XVII<sup>e</sup> au XIX<sup>e</sup> siècle*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2010 (première  
 édition, Paris, École des hautes études en sciences sociales, 1985).
- 81 やや々々も奴隷制廃止後のカリブ海植民地が本国への「同化」を求めたのも、身近な奴隷所有者よりも、奴隷制廃止を推進したフラ  
 ンス本国のほうが自分たちの利害を考慮する存在だと捉えた面もある。前掲拙著『フランス植民地主義の歴史』二七三頁以下。
- 82 拙著『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店、二〇一四年、第七章「フランスにおけるポストコロニアリズム」を参照。
- 83 フランツ・ファノン、佐々木武、北山晴一、中野日出夫訳『アフリカ革命に向けて』みすず書房、一九六九年、二五頁。
- 84 本稿で触れる余裕はないが、一九二四年には気づいた自覚をもつ女性を主人公にした女性作家による小説が発表されている。 Cf.  
 Suzanne Lacascade, *Clair-Solange: âme africaine*, Le Gosier (Guadeloupe), Éditions Long Cours, 2019, préface de Valérie K.  
 Orlando. 関連ついでに参照された。Maryse Condé, *La parole des femmes: essai sur des romancières des Antilles et de langue  
 française*, Paris, L'Harmattan, 1979.
- 85 ファノン前掲書『アフリカ革命に向けて』二七頁。
- 86 同紙の趣旨および論説の内容から日本語タイトルは『市民としての女性』とした。

- 87 Joseph-Gabriel, op.cit., pp. 61-70.
- 88 Paulette Nardal, *Beyond Negritude*, op. cit., pp. 20-21. 同書はポレーレットの新聞の抜粋に「シャープリー・ホイテイングが英訳と解説を付したものである。」
- 89 シャープリー・ホイテイングはポレーレットに貧しい人を包摂するまなざしがあったと認めたとうえで「その書きぶりには「家父長的なトップダウンのエリート主義」がみられると注を付している (*ibid.*, p.23)。
- 90 Grollemund, op.cit., p. 13. 『黒人世界評論』第二号にも混血を重視する論者が掲載されている。 Cf. Roberte Horth, "Histoire sans importance", *La Revue du monde noir*, op.cit., pp. 118-120. 本作品については以下を参照。 Garcia, op.cit., pp. 219-223.
- 91 オランダ領カリブ海出身のエドワーズ・W・ブライテンは「アフリカ人としての人格 (African personality)」を保つべきだと主張し「混血でもあり方を評価しなかつた。」Oruno D. Larra, *La naissance du panafricanisme: les racines caribéennes américaines et africaines du mouvement au XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, L'Harmattan, 2015, pp. 148-149. キール・キルロー、上野俊哉、毛利嘉孝、鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック——近代性としての重意識』月曜社、二〇〇六年、四〇四—四一〇頁。
- 92 Louis Thomas Achille, "Préface", *La Revue du monde noir*, op.cit., p. xii. トムールは母方の従兄弟と姉妹の兄弟のふたごだったと云う。 Cf. Church, op.cit., pp. 384-385.
- 93 サロンが盛んだった一七世紀はまさに奴隷制の時代で、姉妹はそれを踏襲するのは気取りにも滑稽にもみえる」と認識していたとトムールは記している。 Achille, op.cit., pp. xiv-xv.
- 94 Boitain, op.cit., 168.
- 95 ポレーレットの新聞の毎号一面に掲載される図柄からは「そんな情報が読み取れる。」 Cf. Sharpley-Whiting, "Introduction", op.cit., pp. 5-6.
- 96 « Paulette Nardal au Pantheon », [https://annuaire-entreprises.data.gouv.fr/entreprise/paulette-nardal-au-pantheon-pnp-843395146?utm\\_source=chatgpt.com](https://annuaire-entreprises.data.gouv.fr/entreprise/paulette-nardal-au-pantheon-pnp-843395146?utm_source=chatgpt.com) (二〇二五年一月三十一日閲覧)
- 97 近年「再評価の進むセゼールの妻シユザンヌについては以下を参照してください。」 Sharpley-Whiting, *Negritude Women*, op.cit.: Tanella Boni, "Femmes en négritude: Paulette Nardal et Suzanne Césaire", *Rue Descartes*, 83, 2014; Amy Dominique Curtis, *Suzanne Césaire: archéologie littéraire et artistique d'une mémoire empêchée*, Paris, Karthala, 2020. ちなみにシユザンヌの「黒人のインマナーナシヨナリズム」を引き合りに「セゼールやサンジュールのみならず、ポレーレット自身も妹シユザンヌの思想を「こすり盗んだ」(pilfered)との指摘もある。」 Sharpley-Whiting, "Introduction, op.cit.", p.18. 資料が残らない者の掘り起しはより困難である。